
狂獄 The CrazyInferno

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂獄 The Crazy Inferno

【Nコード】

N2492Z

【作者名】

P 琢磨

【あらすじ】

《檻飼い》の青年は思い出す……二年前に起こった《地獄》の工程と末路を。現実を脅かし、正気を貪り食う狂気の群像劇はやがて最悪の結末を呼び覚ます。“狂気”を題材にした中篇ストーリーです。

序章／底いの先（始）（前書き）

4年前の作品を掘り起こしてみました。若干の手直しはしてありますがほぼ当時の原文そのままです。

タグにも入れましたが、バッドエンドの物語です。ただただ膨大な悪意に吞まれる心苦しい想いをされるかも知れません。

テーマは“狂気”。その事に対し僅かでも造詣が深まれば光栄です。

序章 / 底いの先 (始)

『挟峰市大災害から二年』

そんな見出しが躍った新聞を広げていた人物は、ミルクティーの入ったカップを静かに手に取るうと手を動かした。細い華奢な指が滑らかに宙を滑る。

中性的な風貌は女性にも男性にも見え、一見ただけでは即座に見極められない容姿だった。暗色系の外套を纏った格好なので体型もほとんど分からない。歳は20代半ばという頃だろうか。達観、或いは老成したような顔つきをしていた。

その人物がカップを形の整った口許へ運んだ時、不意に声が掛けられた。

「あれ、おじまさ檻雅か？」

声に反応して中性的な人物 檻雅は新聞から顔を上げた。

そこには檻雅と然して歳が変わらないような、こちらは一見して男だと分かる風貌をした人物が立っていた。眼鏡を掛け、落ち着いた色合いの服装を纏った、いかにもインドア風の男である。

檻雅は彼を見てニコリと微笑む。

「やあ、……誰だったかな？」

「おいおい、そりゃ無いだろう？ 同業者の名前を忘れるってオマ

エ……」

「ははは。かこもり籠守くん、だろう？ かこいくち囲井口籠守。私の同業者、つ

まり、おじか《檻飼い》。……これでいいかな？」

「……まったく、オマエ暫く逢わない内に、性格捻じ曲がっちゃったんじゃないか？」

少し強めの陽光が射し込むオープンテラス。平日の昼間と言う時間帯が要因にもなっているが、辺りには数人の客がいるだけで檻雅と男 かこもり籠守に注意を払う者は一人もいなかった。朝の静かな時間帯なら鳥の囀りさえも聞こえてきそうだ。近くの街路樹には青々と

した葉が生い茂り、気の早い虫達が喚声を上げているのが聞こえてくる。

籠守は檻雅の真向かいに腰掛けると、丁度通りかかったウエイトレスに「アイスコーヒー一つ」と注文した。それから檻雅の持つ新聞に眼が向かい、……若干気まずそうに嘆息を零した。

「……もう、あれから2年も経つのか……」

その呟きには幾分かの感慨が込められ、どこか憔悴を感じさせる声音で吐き出された。

檻雅は自身の持つ新聞に再び眼を落とし、顎に指を添えて僅かな間を置くと、

「時が経つのは早いな、……位の感想しか湧かないな」

「……本気か？ ……だとしたら、やっぱりオマエは変わったよ。昔に比べて、随分とな」

籠守が肩を竦める仕草を見て、檻雅は苦笑を滲ませ、そうかも知れない、と小さく返した。籠守もそれ以上は言葉を繋げるつもりは無いようだった。

静寂が訪れたかと思うと、その間隙を縫うようにウエイトレスが湯気の出ないカップを運んで来た。若干汚れが目立つが元は白かったのだろうテーブルに、音を立てないように注意してカップを置いた。ごゆっくり、と小さく口の中で転がすように呟くと、ウエイトレスは頭を下げた立ち去った。

穏やかな時間が過ぎ去るかと思われた矢先、ふと何かを想起したように檻雅が口を開いた。

「時に籠守くん。結論が出ない話の意見を聞かせて貰ってもいいかな？」

籠守は男にしては細い手をカップに伸ばすのを止め、檻雅に視線を向け直す。僅かに眉根が寄った険しい形相になる。

「……何だよ藪から棒に。豪く哲学ぶつた言い方をするな？ ……」

ま、いいぜ。取り敢えず聞かせてくれよ、その結論が出ない話って奴をよ」

籠守が運ばれてきたアイスコーヒーを傾けて返すと、檻雅は視線を彼に合わせたまま続けた。

「狂気とは何か、……という話なんだけどね、」

「……腰を折って悪いけどよ、そりゃ《狂徒》^{きやうと}や《司狂》^{しきやう}　つま

り俺達の敵の話、……って事か？」

表情を更に険しくする籠守。苦々しく言を吐くが、

「いや　違う。純粹に、狂気に関する話だ。奴らとは別だよ」

檻雅がニコリと微笑んで返すのを見て、そうか、ならいい、と籠守は幾分ささくれ立った表情を戻して、再びアイスコーヒーを口に運ぶ。

「……でもまあ、完全に関係無いとは言えないな。彼らとは概してそういうモノだろう？」

「……悪かったよ、俺に構わず先を続けてくれ。もう腰は折らない」

籠守が不機嫌そうに睨むのを見て、檻雅は意地悪そうに微笑を浮かべると小さく咳払いをして、真顔に戻る。

「狂気とは何か、と私は考えていたんだ。……私達、つまり《檻飼

い》は、現在も狂気が根源とされるモノ　《狂皇》^{きやうおう}を追っている。

人に見れば彼らは災厄としか表しようが無い、人の天敵であり、人を滅ぼすモノだ。……だけど私はふと思ったんだよ。本当に狂気とは、悪いモノなのだろうか、と」

そこで序論は終わりなのだろう、ミルクティーで舌を潤す檻雅を見て、籠守は不機嫌と言うより不可解そうな表情を刷き、口を挟む。

「……その話を続ける前に、最後に一つ聞かせてくれ、檻雅。《狂徒》を罪悪以外として話すつもりなら、俺は聞けない。それは俺達が生きる意味を殺す」

「……繰り返し言うが、私は《狂徒》の話をしたいんじゃないんだ。狂気の事だよ、籠守くん。何も《狂徒》を味方に引き入れたいとか、《狂徒》を殺してはいけないとか、そんな話をするつもりは私にだって毛頭無い」

「だったら……？」

「これも何度も言わせないでくれよ、籠守くん。私はね、狂気の話をしたいんだ。《狂徒》は関係無い」

テーブルのあまり汚れていない部分にカップを置き、檻雅はやつと話せるのかな、と深く息を吐き、難しい形相のまま凝然としている青年を見やった。

籠守はまだ解せきれていないようで、不可解そうに檻雅を見つめるに留まっていた。これ以上問答を繰り返す気は無いらしく、質問を飛ばす事もまた、無い。

檻雅は若干表情を和らげてその様子を見やると、幾分か表情を引き締め、言を紡ぎ始めた。

「そう、狂気だ。名の通り、狂えた気持ち。異常な精神状態の事を差す。そのまま受け入れれば、それは確かに危うい。狂気の沙汰……とても常人とは思えないような事を口走り、或いは行動を起こす。それは理解されない、否、理解し得ない精神状態、且つ思考回路だ。だが、それを偏に殺人等の犯罪に引用するのは、どうかと私は思う」

一旦言葉を置き、籠守の様子を窺い見る。彼は黙ったまま檻雅を見つめると、茫洋とした表情で、イマイチ論点が掴めていないようで、それで、と先を促すに留まった。

檻雅は頷きを返し、言を継げる。

「そもそも狂気とは、異常な行動や言動、偏った思考や思想などによくよく見受けられるとは思わないか？ 異常と称する以外に呼べない行為が即ち、狂気に直結していかないだろうか？ 悪い例で例えるなら 猟奇殺人がまさにそれだ。特殊な性癖を懐く犯人の欲望が、惜しみも無く全面に表出したと言っても過言ではない。そここそが常人には理解し得ない行動であり思想。即ち狂気。猟奇とも言える。……だが、それは本当に狂ったと呼べる行動で、思想なのだろうか、私は思った訳だ」

再び言を切り、籠守に発言を促す間を開ける。

籠守は難しそうな顔をして顎に指を添え、顔どおりの唸り声を漏

らした。

「……どうしてオマエがそこに疑問を持つのが、俺には分かん」と口火を切ると籠守は顔を持ち上げて、どこか掴みどころの無い青年の顔を見やる。

「仮に犯人が幼少時に虐待を受け、トラウマとして特殊な性癖を宿してしまい、そのために犯罪を起こしたのだとしたら、それは親に狂わされて起こした犯罪という事になるだろう？ だったら犯人を突き動かしたのは即ち狂気にならないか？ その異常な性癖を懐いた時点で犯人は狂ってしまったと断言できるんじゃないのか？」

切り返す籠守の顔を見て、檻雅は満足そうに微笑を浮かべる。

「貴重な意見をありがとう。参考になるよ。じゃあ最後に一つ、仮定の話の意見を聞かせてほしい」

「……何だ、今の話はこれで終わりなのか？ そんなんでいいのか？」

「ああ。……尤も、メインは次の話なんだがね」

何だそりゃ、と籠守が顔を怪訝に歪めるのを見て、檻雅は再び話仮定の話を紡ぐ。

「最後の話は仮定の話だ。実際には有り得ないからね。だからこそ私には結論が出せなかつたんだ。……現在の世界……21世紀の地球、否、日本限定にしようかな。今の日本の人口の何割が、先程言つたような狂人だと、キミは考えている？」

「……いきなり規模がでかく出たな。……そうだな、1割にも満たないと思うぞ。……思いたいだけかも知れんが、1割もいたらもつと日本は荒んできると思うしな」

「では、ここからが仮定の話だ。キミは狂人の人口の割合が1割未満だと言つたね？ では、それが逆転したら、という話を私はしたいんだ」

「逆？ ……と言うと、常人が、日本の人口の1割未満、って事か？」

怪訝に呟く籠守に、そう、と短く返す檻雅。淡白な返事に籠守は

更に表情を曇らせる。

「有り得ないだろ。そんな世界は成り立たない」

「だから仮定の話なんだ。私の話を少しはちゃんと聞いて欲しいな」

「……悪かったな。だが、そんな狂れた世界なんか根底に敷いて、オマエは一体何が聞きたいんだ？」

意図が掴めない籠守に檻雅は感情を削ぎ落とした顔を向け、彼を不覚にも緊張させる。

「その世界では、先程の猟奇犯罪は、どう映るだろう？」

ああ、なるほど。

籠守はようやく先程からの話の意図が掴め、同時に深い憤りを感じた。

睨みつけるように檻雅を見つめ、怒気を孕ませながら忌々しそうに言を吐く。

「つまり何か？ 《狂徒》は殺人を犯すのが常識の世界の住人だと、そう言いたいのか？」

「キミの結論は、そうだと言つのかな？」

「……あのな、幾ら俺が頭弱いつて言っても、オマエが俺に言わせようとしてる事が、《狂徒》の理解だつて事ぐらいは解るんだぞ？ それはつまり俺達の生業の全否定だつて分からないのか、オマエは？」

怒鳴っている訳でもないのに静かな怒りを孕んだ語気に、まるで空気が緊張しているような錯覚が生じる。籠守の瞳には灼熱のような強い光が感じられた。

それを真正面マクモに受けて尚、檻雅は平然とカップを口許に運び、舌を潤していた。周囲の人間もその気配に気づいた様子は無く、皆泰然と談笑に花を咲かせていた。

まるで、二人の存在がここに無いとでも言つかのよう。

「……どうしてそう話を飛躍したがるかな、キミは。何もそんな事は言っていないのだがね」

「いいや、オマエはそう言ってるんだ。気づいていないのなら、良

かったな、今やっとオマエは気づけた。その思想はな、俺の敵と同じ思想なんだよ、檻雅」

射殺さんばかりに敵意を剥き出しにした眼差しを向けられ、檻雅は小さく吐息を漏らして肩を竦める。理解されない事に対する徒労や諦念を表面に刷き始める。

そんな檻雅を見て、表情を和らげてどこか悲愴の面持ちを浮かべる籠守。

「……やっぱり引き摺ってんだな、二年前の事件を」
「……そう見えるかい？」

檻雅が疲れたように微苦笑を浮かべるのを見て、籠守は力強く確りと首肯を返した。

「じゃないと今のオマエの説明が付かん。……【境会】^{きょうかい}からも言ってきたんだろ？ 《檻飼い》を辞めろ、……って」

「……知ってる、か」

腫れ物に触るような籠守の眼差しから逃げるように、檻雅は眼を閉じると、眇めるようにしてテーブル上のカップを見つめる。

「……私に《檻飼い》を辞める気は更々無い。……でもキミ達から見れば、とてもではないが続けられる状態には見えないんだろ？」

「……俺からも辞職を勧める。まさかこんな精神状態だとは思ってなかったからな。オマエは頑張り過ぎたんだよ。……母親の手掛かりを探す事が人生の全てじゃないだろ？ 《檻飼い》以外にも別の生き方がある筈だろ？」

「……ふふ、その言葉、自身にも向けられるかな、籠守くん？」

切り返され、籠守は思わず口ごもる。

その様子を見て、檻雅は穏やかな微笑を滲ませた。

「その気持ち、汲んでくれないかな？」

「……それで続けられるのか？ オマエは狂気を相手に戦えるのか？ 自身をも蝕む狂気と隣り合わせで生きていけるのか？」

本気で心配している籠守に檻雅は微苦笑を返すだけだった。

暫く見つめ合っていたが、……やがて籠守は視線を下ろし、はあ、

と重たい嘆息を零した。暖かい、寧ろ僅かではあるが暑さを感じさせる眩しげな陽光が降り注ぐ中、それに合うような柔らかな苦笑を浮かべて、先を続けた。

「……まあ、俺が言ったところで高が知れてるか。……俺がオマエの立場で同じ事を言われたら、オマエと同じように返すと思うし」「ふふ、……お互い、難儀な職モノに就いてしまったものだな、籠守くん」

「全くだ。……それも仕方無いだろ、お家柄って奴だ」
二人は小さく笑い合い、すぐに落ち着きを取り戻した。

「……っと、俺はもう行くな？ これから仕事なんだ。何でも、この近辺に《歪ひずみ》が在るらしい。オマエも早くこの辺を離れた方がいい。巻き込みたくないし」

「……ああ、分かったよ。《檻飼かきい》として手伝いたい気持ちは山々だが、今の私ではキミの足手纏あしづないにしかならないだろうしね。……否、寧ろ致命傷になるかな？」

「違うない」

再び小さな笑声が漏れた。籠守が紙幣を一枚テーブルに置き、立ち上がる。柔らかな陽射しを背に、静かに歩み去って行く。

「ここは俺の奢りでいいから、早く行け。……弱い奴から、喰われていくんだから」

「ああ、そうするよ。……済まない、気分を悪くするような話をし
て」

「いいって。……今度逢う時を楽しみにしてるぜ？ じゃあな」

そう言って立ち去る籠守の背中を見送り、檻雅はふとテーブルに置いたままになっていた新聞に眼を向け直した。檻雅は瞳を僅かに眇めると、細い指でその文字を、す、となぞった。

『挟峰市大災害から二年』

……ふと、あの頃の事を思い出そうとしてみる。

そう、あの《地獄》は確か

序章 / 底いの先 (始) (後書き)

新連載と言う形ですが実質昔の作品を思い出したように公開し始めただけですので、気が向き次第毎日更新するかもです。宜しかったら最後までご覧頂きますように。

零章 / 集いし闇徒（前書き）

早速悪魔みたいな殺人が起きます。

ここが分水嶺みたいなモノです。どうか気を悪くされた方はここで引き返される事をご推奨致します。

この程度の悪意なんざ屁でもないという方、どうか最後までご覧頂けるよう祈っております。

零章 / 集いし闇徒

犯行に及ぶ際、必ず俺は対象を眠らせておく。

液状の睡眠薬をハンカチに滲ませ、就寝している対象の口許に当てて深い睡眠へと誘導する。その後特注の轡くわを嵌め、首に鎖付きの枷かせを嵌めると 殴り起こす。

「……んぐ？ んむ、む？」

対象 男は轡のせいで声を出せず、くぐもった声を上げる。同時に首に嵌められた枷が邪魔で部屋から逃げる事も出来ない。

首枷の鎖は、部屋の中心に穿った杭に繋がっている。杭 細いが意外と頑丈な丸太の底辺に鉄片を喰い込ませ、その鉄片を畳敷きの床に直接釘で打ち込んだ代物だ。この杭が犯行中に外れた事は今まで一度としてない。決して完璧な杭とは言えないし、畳敷きだと相当の力を込めたらすぐに抜けそうなものだが、先程述べたように生憎と今まで一度として外れた事は無い。

「その轡は外れないようになってる。どれだけ足掻こうとな」「むぐ？ んむ、ぐ、う」

男は意識が徐々に覚醒しつつあるようで、必死に轡を外そうと自由な両手で足掻き始める。が、どう足掻いても轡は外れないし、首枷も全く取れない。

「オマエが生き残るためには俺を倒すしかない。俺はその轡と枷を外す鍵を持っている。オマエは俺から鍵を奪えば自由になる」

困惑している男は訳も分からず俺の声を聞き、徐々に青褪めていくのが判った。

俺は黒い革の手袋を嵌め、男に向かって歩き出す。

男は警戒するように俺から離れるように移動し始める。明らかに困惑しており、男は何やら説明を求めるように声を荒らげるが、全ては轡に因り俺の耳には決して届かない。

布団しかない、そう広くない六畳程の部屋に大人一人と青年一人

がいれば、あつと言う間に距離は無くなる。部屋には北側と西側に障子戸があるだけで変わった物は一切無く、小ざつぱりとしている。単に俺が物を移動し、戦い易くしたただけだが。南側と東側は壁で、且つ杭に繋がれた鎖は障子戸に届くまでの長さを持たない。生き残るためには、或いは逃げ延びるためには俺を倒す以外に道は無い。

俺の拳が唸りを上げ、男の顔を抉るように突き刺さる。

男は呻き声を発したが全て轡の中でくぐもる。痛みでふら付いたようだが倒れるには至らない。俺は更に拳を鳩尾みぞおちに叩き込む。

鋭く突き刺さった拳に呼応するように、男の体が「く」の字に折れ曲がる。そのまま膝を突き、辛そうに腹を摩る。呻いているのは痛み要因の嗚咽のようだった。

俺は構わず厚めの靴下を上から履いた安全靴で男の腹部を蹴り上げる。鈍い音と共に男が轡の奥で咳き込み始める。肺を潰したのか。轡の端から赤い液が滴る。

最早動ける状態じゃない男の髪を掴み上げ、顔を畳敷きの床に叩きつける。鼻が潰れたのか、床から引き剥がすと鼻血を出した汚らしい顔になっていた。更に叩きつけ、それから髪を離すと気を失ったのかそのまま動かなくなる。

これで終わっては話にならない。俺はポケットから枷を外すための鍵を取り出すと、男の手を掴み上げる。人差し指を握り締め、指と爪の間に鍵を刺し込む。激痛を感じたのか男の体がビクリと脈打つ。構わず刺し込み、奥まで突き刺すとそのまま難無く爪を引き剥がした。

「ッッ」

男がくぐもった絶叫を上げたのが判った。凄まじい力で俺を突き飛ばし、涙を流しながら手を押さえてもんどりを打ち始める。人差し指の先からは活火山のように血液が流れ出していた。

俺はゆっくりと立ち上がり、再び男の腹部に安全靴の爪先蹴りを突き込む。男は声にならない呻き声を上げ、腹を押さえたまま再び蹲る。蹲ろつが構わない、黙々と腹に蹴りを入れ続ける。

そして意識を失ったと思った時に、指の爪を剥がす。その繰り返し。

やがて男は意識があるにも拘らず何の抵抗もしなくなった。

頃合いだな。俺は最後の仕上げにと、持参の灯油を男にブツ掛け、部屋一面にも撒布し、ライターで男の足から火を点ける。

男は最早懇願もせず、ようやく激痛から解き放たれると、惨過ぎる絶望に恍惚とした表情を浮かべて自身を焼き尽くす炎を見つめていた。

俺は男の家を後にし、濃い夜の闇へと身を躍らせる。

夏が近いからか夜とは言ってもそう寒さは感じられない。寧ろ一仕事終えた今の状態では心地良い涼しさがある。夜気に沈んだ町に俄かに活気づく音を背後に感じながら、俺は空に浮かぶ禍々しい色を湛えた月を見上げて歩いていく。

俺は随分前から不定期に殺人を行っている。しかも足が着くのを警戒し、大分時期を空けて行うように心掛け、使用する枷などの小物は他県で購入している。特注の轡などは大きな鞣革などに改造を施して作ったモノのため、売ってはいないのだが。ともあれ今現在まで犯行が白日に曝された事は一度としてない。

今日は何十人目を殺害したかを考えながら帰途に着き、自宅

住宅地の一角にあるどこにでもありそうな二階建ての一軒家の一室に戻る。

「手馴れてんなア、オマエ」

自室に入って荷物を放り投げ、シャワーを浴びてこようと背中を向けた瞬間、声が耳朶じだを打った。

この部屋には誰もいない筈だ。俺は何年も前から一人暮らしをしていたし、親戚が訪ねて来る事は今まで一度も無かった。同時に、人が発するであろう気配が、声を聞いた今でも全く感じられなかった。

どんな人でも少なからず僅かな音を発している。それは呼吸だったり衣擦れだったり、必ず些細な音を立てる。それが現状では一切感じられなかった。

「もうどれだけになるんだ？ 殺人者になって」
「……」

部屋には闇が落ちている。灯りを点けず、窓もカーテンも閉めきられているためだ。本来ならば荷物を部屋に放って灯りを点けるところなのだが、その動作を先回りするように謎の声が掛かったのだ。俺は確認している。部屋に入る前に中に誰もいない事を。幾ら闇に沈んでいたとしても、人を見逃すほど俺の眼は使い勝手が悪くない。殺人を犯すのは夜だけのため夜目は利くように訓練している。

部屋には隠れるような隙間は無い筈だ。入口の扉から見て左側に本棚が壁を埋め、正面奥に窓と机、右側にベッドがあるだけの簡素な部屋。なのに どこに、いたと言っただ？

「証拠を一切残さないア、魂消^{たまげ}たねエ。その歳で立派な殺人鬼かア……」

気配は、無い。だが背後には確かに声を発する《何か》がいる。

俺は瞬間的に思考を回し、背後の《何か》をどうすべきか判断を下した。 殺^ヤるしかない。

着ていたジャケットの裏地にそっと手を差し、一挙動で万年筆を抜き放ち、 動作を極限まで収斂させる。胴体を捻って振り返り、一息で背後の何者かへと跳ぶ 距離を一瞬で殺し、一切の間断も無く万年筆を背後の何者か 外套を羽織った子供の首筋に突き立てる！

ぐちり、と肉が抉れる。

生々しい感触が手のひらに広がり、その感触が消え去る前に更に深く突っ込み、 横に捌く。

ばしッ、と勢いよく鮮血が迸り、部屋にムツとした血臭が広がる。と、辺りに鮮血が撒布する。

ぼたぼたぼた と鮮血が降り注ぐ部屋の中央で、首を掻っ

捌かれた少年が俺と視線を交える。濁った瞳は白眼の部分が深紅に染まり、黒眼の部分が金色に彩られていた。まるで猫のように瞳だけが闇の中にゆらりと浮かび上がる。

「ひゃはア！ いいねいいねエ、その反応。取り敢えず規定外と感じた時点で殺害を躊躇わねエたア、根っからの殺人鬼なんだな」

「何で、生きてる。」

ポタポタと鮮血が床板フローリングを満たしていく中、少年は無邪気な笑みを浮かべて俺を見つめていた。そう、あくまで何の悪意も感じさせない笑顔を浮かべて。

首筋からの流血は止まらなかったが、それと同様に少年からは狂気や戦慄も止め処なく溢れ出ていた。

「コレは、何だ。」

まるで現実感が無い。夢の中にいるかのような錯覚を感じる。

「……オマエは、何だ？」

俺は干乾びた喉を震わせて必死に声を絞り出した。

あまりに龐大な狂気を浴びて、俺は脳が機能不全を起こし掛けているのを悟る。

「オレサマか？ オレサマは狂界の使い、ってトコかなア。そう身構えんなよ、何もオマエの命を刈り取りに来た死神って訳じゃアねエんだからよ」

無邪気に紡がれる言葉には滲み出る怖気が隠しきれていない。

首を捌かれた少年は悪意の無い純真に満ちた笑顔で更に言を続けた。

「オレサマはオマエの願望を叶えに来たのサ」

軋む笑みが張りつき、全身に戦慄が駆け抜ける。

願望を叶えに来た。そう、少年は言った。……だが、俺には一瞬何を言われたか分からなかった。そして現状を認識する事も、出来なかった。

「……願望？」理解が及ばず鸚鵡オウムのように返してしまう。

「そう。オマエの願望を叶える。……なあに、難しく考える事アねエよ。オマエは望むだけでいい。願うだけでいい。想うだけでいい。それだけでオマエの望みを、願いを、想いを、ゼエーんぶ成就してやるってんだ。……分かったかア？」

……意味が分からない。何を言ってるんだ、コイツは。

異常な事態には違いない。気配を感じさせない少年、首を捌かれても平然と話し掛けてくる少年、願望を叶えると宣言、少年。どれにしても現実感がまるで伴わない夢物語のような事態だ。

カラカラの喉を一滴の唾が通り抜ける頃、俺は緊張したまま、だがそれ以上にこの事態を許容しようと、少年に問いを発した。

「……叶えられる願いは、一つだけなのか？」

あくまで利己的に。これが仮に夢だとしても最高の結末を望んだ方が夢の分だけ得をした気分も味わえよう。……こんな生々しい夢を見るのは生まれて初めてだが。

紅金の瞳の少年は三日月のように口を歪めると、

「いいや、何度でも、どれだけでも、オマエの望みが尽きるまで、だ。……疑いが晴れねエなら試しに使ってみりゃいい。ナニが欲しい？ 金か？ 女か？ 力か？」

自覚していた。自身に狂気が流れ込んでくるのを。止め処ない純粹なる衝動が体内を巡るのを。

「……何でも、いいんだな……？」

最後の、確認。

了承が出たら、俺は

三日月の形に歪む口は、

「ああ」

凄絶なまでの笑みを、結んだ。

その夜は鮮血のように紅い三日月が禍々しく浮かんでいた。

まるで人を喰らったような三日月に惹かれ、一人、また一人とそ

の地に足を向ける。

「……兄貴、ここだ。ここから狂気の……スゲエ薄いけど、色んなモンをごちゃ混ぜにしたような臭いがする……！」

目深に頭巾フードを被った幼い人物が発した声に、上背のある、同じく頭巾を目深に被った人物が顎に手をやり、敵かに頷く。

場所は町と町を繋ぐ陸橋の上。陸橋の下では夜中だと言うのに車道から騒音が消える事は無い。円形の光だけが車道を照らしていく。陸橋の上には月明かり以外の光源は無く、僅かに朱に染まった影が二人分、止まっているのが映った。

上背だけを見ると親子に見えない事も無い二人組みの外套を纏った人物は、朱い月に照らされて闇のように地上に影を落としていた。幼い方の影が鼻をスンスンと鳴らし、喉の奥で唸りを上げる。まるで獣染みた仕草に、併し大人の方の影は諫める事はせず、

「そつか……やはり、人が集まる場所には付き物のようだな、
《歪》^{ひびみ}というモノは」

学者染みた呟きを発し、大きい影は更に小声で独白を続ける。

「人の底辺にある狂気性とは即ち、密集した空間で表出し易いという、良き例なのかも知れないな。故に《歪》という名の狂気の源泉が世界に生じ、それが人の正気を喰らい尽くし、更なる狂気を……」

「おい兄貴、ストップ、ストップ！」

目前で大きく両手を振る幼い影に大きい影はハッと我に返り、頭巾の上から頭を掻く。地上を駆ける騒音を耳に留めながら大きい影が苦笑を零す。

「済まない、どうも私は没我し易い。……どうしても《歪》が近くなると想起してしまうのだよ、……母を」

一瞬凍るように冷たい光を瞳に宿した大きい影に幼い影は困った風に表情を苦らせ、何とか励まそうと声を掛ける。

「……先代の事ア仕方ねエよ、兄貴。きつとどこかで生きてる筈さ。
……きつと」

言いつつ自信が無くなってきたのか、俯うつむきつつある幼い影。大き

い影はその頭にそつと手を置き、柔らかく撫でる。幼い影が気持ち良さそうに首を竦める。

「……済まない、キミを困らせるつもりは無かったんだが、どうやら意図せずそうさせてしまっていたみたいだね。悪かった」

「……兄貴は、先代の事を《狂皇》きやうおうなら知っていると、本当にそう思うのか？」

そう尋ねる幼い影に対して大きい影はフツと皮肉った微笑を零し、空を仰いだ。

朱に染まる、禍々しいまでの月が浮かぶ、闇黒に聳そびえる空を。

「……分からない。でも可能性があるのなら賭けてみたくなるそれが人間というモノだよ」

告げる澄んだ声音は朱色の月まで届く事は無く、闇へと解けて消えた。

二人の外套を羽織った人物が往く陸橋より幾分か離れた
挟峰はざまみねの市街。夜中の時間帯にも拘らず煌々と照るビルの電飾に車のヘッドライト、そして多くの人の往来が町に睡眠を与えぬように瞬いていた。世界は夜だと言うのに、それに抗うように挟峰の市街地は昼の明るさ、そして日中の賑わいを見せていた。

そんな夜に抗う町を人目を惹く人物が闊歩していた。

「ん〜ん、んっんっん〜」

端的に言えば絶世の美女だった。夏も近い六月中旬の夜空の下、地面に届きそうな程に丈が長い、男物のような鮮やかな紅い厚手のコートを羽織り、その下には豊満な胸を隠す事しかできないような丈の短いタンクトップと、太腿を完全に露にしたシヨートパンツという格好。更にその下にある肉体はグラビアモデルのように整い、且つ長身。美顔にも拘らずやんちゃっぽい少年らしさも内包した容貌。黎明の空を思わせる深い紺色を湛えた、腰まで届きそうな長髪。全てに於いて一度見たら忘れられない程の麗人だった。

20代前後と思しき美女は鼻唄を鳴らしながら町を散策している

ようだった。

その女に声を掛ける者はいない。更に背後からは全くいなかった。コートの中に提げている物があまりにあまりな物で、声を掛けるのを躊躇わせてしまうのである。

「……キミ」

女が鼻唄を止めて振り返ると、警察官らしい男が不審者を見る目で女に声を掛けたようだった。怪訝そうに歩み寄って来る警官らしき男の姿が視界に映り込む。

女はキョトンとした顔のまま、ナニ？ と闇に染み渡るような透き通る声で応じる。

「その……背中に吊っているそれは何だね？」

警察官が指差すのは女の背後にある物。女は何食わぬ顔で警察官に笑顔を返した。

「大錠だけど」

「……あのね、そんな物ぶら提げてこんな時間にどこ行くつもりなの？ 危ないから元の場所に戻して、キミも早く帰りなさい」

警察官が呆れ顔で嘆息する姿を見て、女はポリポリと頬を掻く。

「元の場所つ言ってもよォー、コレどこに在った物か憶えてねエし」

「……じゃあどうして持つてるの？」怪訝そうに尋ねる警察官の男。「どうして持つてるかって？ ヒヤハハハ！ オーマエ可笑しな事訊くなア？ 使うからに決まってンじゃねエか」

哄笑を上げる女の背に吊られたそれ 錠と呼ぶには些か大き過ぎる、180？程の背丈がある女と同じ程の大きさがある 大錠には、刃に禍々しい鮮血色の紋様が描かれているが、それがホンモノかどうかは定かではない。とても一般人が持つような物ではない事だけは確かだった。

女の狂態に警察官の男は顔を顰め、幾分か居心地が悪そうに言を繋ぐ。

「……熊でも狩る気かい？ 挟峰の山にゃあ熊は出ないよ？」

至極真つ当な事を告げた筈なのに、女は逆に不思議そうな顔をし

て警察官の顔を覗き込む。邪気の一切が感じられない、硝子のように無垢な眼差しが男を射抜く。感情すらも感じさせない、底が全く見通せない闇の瞳が男を捉えて離さなかった。

警察官の男がたじろいで身動きした頃、ようやく女は反応を返した。哄笑で。

「ヒヤハハハハ！……あーコレ、熊狩る奴に見えたア？　ちツがうんだなア、コレがさア」

得体の知れない憫笑を浮かべていた女だったが、そこまで告げると急に表情を改め、感情の通らない人形染みた真顔になった。

「ああ、そうだ。こりや熊狩る得物だ。文句あんなら　オマエも一緒に、どうだ？」

ニイ、と八重歯を覗かせ、唇を歪ませて凄絶な冷笑を浮かべる女に、警察官の男は最早言葉が出なかった。

脅されている　それを盾に取って話し合えばまだ自身が上位に立てる？　有り得ない。彼女にはそんな常識通じる訳が無いのだ。

彼女は明らかに異常だ。恐らく自分が盾突くなんて事をしたら

男は微かに体を震わせながら、ただ女から眼が離せなかった。出来たら今すぐにも視線を外して逃げ出したい。でも男にはそれが出来なかった。女の瞳に捉えられていたからだ。

女の感情を通さない闇に通じる瞳に射抜かれ、全身が完全に機能を凍結していた。まるで心の底にある芯を素手で握り取られたような錯覚に曝され、男の額には見る見る脂汗が浮かんできた。

す、と急に女が視線を逸らした結果、男は解放されたと同時にその場に尻餅を着かざるを得なかった。冷や汗がドツと出て、忘れていた呼吸を今更のように思い出す。喘ぐように喉を震わせて息を吸い込み、早鐘を打つ心臓を他人事のように聞き入れる。

女は背　巨大な大鉈を向けて、片手をヒラヒラと振って立ち去ろうとしていた。

「まっ、今は手出ししねエーよ。早死にしたくなけりゃ、オイ

ラから離れてるこつたなア」

訳の解らない単語を吐き残し、女は闇夜に消え去る。

残された男は言いよつた無の無い悪寒に曝され、すぐには動き出す事すら叶わなかつた。

その頃同じ市 挟峰の住宅地。似たような家々が連なり、これと言つた特徴も見出せない地域が数キロに渡つて続いている。市街の喧騒が届かぬ静謐な空間が形成されている。そのとある一軒家の一室。

勉強机に向かつて陣取り、指でペンを弄んでいる少女がいた。

「……」

その視線は窓の外。今は街路灯の小さな明かりが僅かに差し込んでいるが、部屋の灯りに比べたら話にならない程度のモノで、外の暗さのせいで窓硝子には少女の端整な顔が映り込んでいた。

人形のようにくりつとした愛らしい黒い瞳に通つた鼻筋、小さく引き結ばれた口許、美少女と形容しても差し支えない程に整つた顔立ちは今、不快気に曇っていた。本人自身その不快の許は分かつていたのだが、その事に関して今結論を出そうかどうか黙想していたところであつた。

少女は席を立ち窓硝子を開けた。夏の匂いがする風が彼女の短めの髪を攫つたが、少女は構わずその先を見やる。

朱い月が睥睨する世界は空気の音さえ聞こえてきそうなほど静かだつた。静謐な世界を侵すモノなど見渡す限り無く、沈黙と言つ名の虚無を蔽かに形成していた。

だが、少女は外に広がる異常を鋭敏に感じ取つていた。

それは

「……遂に、この町にも」

何を見るでもなく外に視線を向け続ける少女の瞳は、頑なな意志を強く滾らせていた。その時思い出したかのように遠くから消防車の奏でるサイレンが響いて聞こえ始めた。

「……彼は渡しませんよ。私が必ず 護つてみせる……！」
握り拳を固め、少女は決意を新たに、 窓硝子を閉める。
閉ざされた世界には外界の全てを遮断するように一切の音が介在しなかった。

窓が閉められた外界の 更にも。遙か上空に一人分の影が映り込んだ。

濃紺の布衣を纏った、20代半ば程の男。艶がかった総髪は黒。大蛇のような爬虫類染みた印象を与える顔立ちに、瞳は濁った黒の三白眼。スラリとした体軀だが華奢には見えない。学者然とした雰囲気を感じさせるもどこか人を見下したような印象を隠せない、そんな人物だった。

足場は無い。ただ何の力が働いているのか、苦も無く宙に立っていた。

「……狂界の使者が現界した、か。これにてこの地は穢される。さて、此度はどれ程の狂気が渦巻くのか 《狂皇》様」

男の囁きは闇夜に融け、地上に降り注ぐ事は無かった。

朱い月の光を浴びたその人物は次の瞬間には周囲に浮かぶ薄い闇へと融け、失せた。

残された空には禍々しくも輝き放つ、朱く濁った眼球が浮かんでいた

「……さア、役者は揃った。後は、開幕の鐘を待とうじゃアないか

斯くして始まる狂れた世界の創世記。

何が狂い、何が壊れ、何が終わるのか、篤とご覧頂こう

吉章 / 疼く悪夢

刻木祥きりぎきさちがその夢を見るのは、何も今日が初めてではなかった。

内容は至極簡単で、怪物に殺される夢だ。何度も見たし、その度に冷や汗びっしょりで目覚めるものだから、内容が脳髓に刻み込まれたようにいつだって意識に上り詰めてくる。まるで怪物が心の奥底から自分の命を虎視眈々と狙っているようにも思えて、とてもではないが気分が良くなる事は無い。

脳髓にこびり付いた悪夢はいつだって同じ風景を映し出した。

そこは焼け野原と称せられる場所。辺りには何かの残骸が在るだけで、目印になるような建造物や標識など、視覚的な物体は一切が根絶していた。もしかしたら建造物などの残骸がそれなのかも知れなかったが、元の姿を想像する事が出来ない程にコンクリート片までもが粉碎し尽くされていた。

時間帯は夜なのだろう。仄暗い空気が敷き詰められ、視界はとても良好とは言えない。ただ、辺りの闇が濃い割に頭上に浮かぶ月だけが太陽のように照りついていた。

……お母さん。

無意識の内に零れる単語。それは鼓膜を打つ訳ではない、脳の奥で鳴る残響だった。その夢には自身の声は録音されていないらしく、在るのは怪物の声だけ。祥自身の声は音声処理でもされたように全く聞こえない。

夢で祥は母親の姿を探していたが、夢を見ている現在の祥には母親はいない。父親も同様だ。幼い頃に事故で亡くした。その場に祥が居合わせた訳ではなく、二人は旅行先で不幸な事故に遭ったと聞かされている。祥はそれ以来親戚 父方の祖父の許で生活していた。尤も中学卒業間際に祖父が事故で急死したので、去年からは一人暮らしとなっていたが。

……お母さん、どこ……？

トボトボと、当ても無く足を進ませる祥の視界にやがてそれが映り込む。

残骸の上に座り込み、片手を高らかに持ち上げ、手に掴んだ壺から零れ出る水を浴びる、人の姿。

幻想的な映像ではあつた。太陽のように輝く月の光を受けた人物は、まるで湖の上に浮かぶ水の妖精に見えなくも無かつた、それ以上近づかなければ。

「ヒヤハハハハハハ！」

人の姿をした《何か》は、浴びるように水を飲み、空が割れんばかりの哄笑を詠っていた。まるでそういう雑音ノイズでも言わんばかりの笑声そつおんに祥は顔を顰める。否、顰めたような表情の機微を感じる。

一歩ずつ、祥は人の姿をした《何か》に近づいていく。覚束無い足取りで、だが確実に。

やがて哄笑を上げる《それ》が浴びているモノが、掴んでいるモノが分かる距離になる。吐き気を催す、その事実気づく距離に。

人の生首だつた。更に近づくと分かる事だが、恐怖に顔を引き攀らせた人の生首を掴み、《それ》は滴る鮮血を浴びるように飲んでた。まるで聖水でも浴びるかのように恍惚とした表情を浮かべ、これでもかと言う位に愉悦に浸っていた。

やがて《それ》が座り込む残骸も判別できる距離になる。人の死体の山だ。無惨にも体の一部を刮こそげ取られた損壊の激しい死体が堆く山積しているようだつた。そこに無遠慮にも、高級な椅子にでも腰掛けるように《それ》は片膝を折って座していた。

死体の山に腰掛けた《それ》は祥に気づくと、ゆっくりと生首を口許に運び、大きな口を開け、生首を齧かじり取つた。

骨と蛋白質が噛み砕かれる生々しい音が響き、夢の中とは言え祥は凄惨過ぎる光景に胸焼けが起こる。まるで意識がそこに宿つたように、現実としか思えない臨場感でその光景を見つめている。胸が張り裂けそうに気持ち悪さに喉の奥が一杯になる。

「……まだ生き残りが居ったか。よくぞ今まで生き抜けたものだ。私はここにある全てを殺し尽くしたと思っておったのだが」

《それ》は祥を見ても然したる感慨が湧かないようで、急ぐでもなく焦るでもなく泰然とした足取りで彼の許へと歩み寄る。澱みの感じられない歩調はそこが青信号の点つた横断歩道でもあるかのようになり、迷い無く祥へと向かって来る。

祥は逃げない。夢を見ている祥自身は逃げたいのだが、夢の中の祥が全く動こうとしないのだ。幾ら祥が逃げようともがいたところで、夢の中の祥は身動き一つしない。ただ黙して《それ》を見つめている。

……お母さん。

何度も呟く、同じ単語。だが、その単語が差す存在はこの場には居合わせない。助けてくれる母の姿はどこにも無い。

その間にも《それ》は歩を進め、あつと言つ間に距離は殺されていた。眼前に聳える大人の背丈を有する《それ》は祥を見下ろし、「……命乞いすらせぬか。……ふん、少しは抗えばよいものを……命が惜しくないのか？ 小僧」

《それ》は不愉快そうに祥を見下ろすが、祥は見上げもせず《それ》の胸を見つめていた。筋肉などありそうも無い華奢にさえ映る腹だった。かと言って先程遠目に見た体つきを見ても、とても人を屠るような膂力じりょりょくなど持ち合わせていないようなのに。《それ》の一体どこにこれだけの人間を屠る力が在るのか、祥には皆目見当が付かない。

その手が伸び、祥の首を鷲掴みにする。相手がただの物であるかのように、一切の遠慮を感じさせない手つきで祥の首を捻り上げる。苦しい。

それは夢の中の祥の呻きではなく、夢を見る祥自身が感じた錯覚だった。息が詰まり、頭に酸素が入らなくなる。視界が明滅し、徐々に思考の白紙化が始まる。

白熱する視界に《それ》の顔が映し出される。

祥の首を握り

締めたまま、体ごと持ち上げたのだろう。祥の視線と《それ》の視線が交わる。

女性のそれを思わせる顔立ちだったが、何より眼を惹いたのが醒めた眼だった。

「……抵抗せぬ者を殺めても不快だの。　　去ね^い」

視界が一転、深紅に染まる。

そして祥は現実で目が覚める、　　筈だった。

いつもならここで現実の世界に覚醒するのだが、　　今日は違っていた。

塵のように放り出され、祥の視界が地面を転がる。やがて動きが止まる頃、祥の視界に一人の人間が映り込んだ。男か女か判然としない中性的な人物が。

《それ》と対峙するように現れた人影は祥に憐憫の眼差しを向けると、即座に《それ》へと視線を投げ直した。

「ん？　華檻^{かおり}、か。貴様のお陰で私は解放された。礼を言うぞ？　　で、何だ？　　もう貴様には用は無いのだが。それとも何か？

親友たる私の手で葬りたいか？」

「……もう、戻れないのね。　　こんな狂れた悲劇^{イカ}はもう終わらせましよう。これでお別れよ、　　《屠鬼^{とぎ}》！」

人影　　どうやら女の人か《それ》に向かって啖呵を切ると、

視界が胡乱^{うろん}となり、映像がパツタリと途絶えた。

死んだ、と思った。祥の中にある主電源が落とされたような一切の感覚が遮断したような状態に陥った。

闇　　視界も閉ざされ、感覚も失われ、あるのは永久に続きそうな闇だけ。

……やがてどれ程の時間が経ったのか。瞳に光が戻るのを感じた。片眼が無理矢理に抉^こじ開けられ、虚ろな視界が戻ってきたのだ。

視力が戻っていないせいかな焦点^{ピント}が合わず、ぼやける視界に映るのは輪郭^{シルエット}を伴わない一人分の人影。

「アナタは生きるのよ、祥くん。……生き抜いて、何が何でも。彼

女の分も、彼女の分以上に、生を噛み締めて。それが……最初で最後の、願いだから……」
ぐち、と。

瞳に、異物が入り

ひゅ、と震える喉から僅かに呼気が漏れて、やっと呼吸できている事を自覚する。自身が生きていると、ベッドの上で再認識する。

ぐる、と右眼が疼くのが分かった。

一連の夢を見た後、祥はいつも右眼が疼くのを感じていた。疼く……意識してないのに右眼が蠕動するぜんどうような感覚があるのだ。まるで右眼だけに別の意志が宿ったかのような不気味な感覚。

ただ今日は少し違っていた。いつもの夢の続きを見てしまった。

それは言わば死んだ後の世界。それを見た結果なのか、夢という名の地獄を体感したような酷い徒労を感じてしまった。

ベッドの上上半身を起こし、祥は右眼に瞼の上から触れる。

と、触れる直前になって疼きは治まり、平生と変わらない状態に戻る。視界にはいつもの光景 祥の起臥きがする部屋が映り込む。簡素な造りの部屋で、入口の扉から見て勉強をするための机が左手に据え置きの本棚が机の脇にあり、筆筥が部屋の奥にあるだけ。祥の体があるベッドは入口の扉の右手に鎮座している。

「……また、あの夢、か……」

意識が覚醒し、今までの一連の光景が夢だと再認される。この時点ですべてが夢だと認識できるのだから、それまでは本当の現実の出来事だとずっと錯覚していたのだとも判る。……この夢が現実ニユースに起これば事件の一つにでもなっているだろうが。

祥は右眼を瞼の上から揉むように押さえ、先程の夢の結末を少しだけ思い出す。

想像を絶する怖気が全身を駆け抜ける。誰かは知らないが瞳の中に何かを詰め込もうとしていた。その感触が蘇り、喉許にまで

吐き気が込み上げてくる。即座に妄想を打ち切り、落ち着こうと思考を切り替えた。

汗でぐっしより濡れたシャツを摘まみ、祥は小さくため息を零す。シャワーを浴びてから行こう。そう考え、思考を現実に切り替える。じゃないと彼女に何を言われるか分からないから。

「行つてきます」

玄関口で咳きを漏らした祥は、家を出て戸締りを行う。

ブレザー越しに感じる朝陽に暖かさを感じつつ、静かな朝の住宅地を歩く。あまり大きな道ではないため、車が二台も並ぶと通行できなくなり、抜け道としてはあまり活用されていない。挟峰の住宅地はこういう道が比較的多い。大通りに出れば車の交通量が多くなるし途端に騒がしくなるが、この辺は夜になると殆ど音の感じられない地帯になる。車の交通量自体も、夜間はともかく日中でさえも殆ど無いのだから。

あちこちから生活音が聞こえてくる狭い道を歩いていると、前方から変わった人が歩いて来るのが見えた。

まず背が高いのですぐに眼に入った。180?はありそうな、グラビアモデルのような体型をしている女性。次にもう夏も近いと言うのに鮮やかな紅色の足下まで届きそうな程の大きな男物のコートを纏っている。流石に前の釦は全て外し、その下は下着と見紛うような、胸がキツそうな丈の短いタンクトップと、同じく子供用のように太腿が露になっっているホットパンツという格好ではあったが、それでも暑そうだと感じる。

何より眼を惹くのは、その美顔だった。やんちゃな少年らしさを含みつつも女性としての可愛らしさを内包した快活な面構え。艶やかな深い紺色の髪は滑らかに腰まで届く長さを有している。一度見たら絶対に忘れないような麗人だった。

祥は一瞬見蕩れるように女性を眺めていたがハッと我に返り、そうだ僕には夢生ちゃんという彼女がいるじゃないか、と慌てて頭を

振った。

そう思つて自身に向かつて一つ律儀に頷くと、通学路でもある道を再び歩き始める。

眼を惹いてしまつが、それでも今ここにいない彼女の事を考えて必死に眼を逸らそうとしている、と。

「なア、そのオマエ」

不意に掛けられた声に祥は一瞬誰の事を言つてるんだらうと思つて辺りを見回すが、誰もいない。そして再び顔を女性に向け直すと、眼前に美顔が聳えていた。

「ッッ!?」

「オーマエ、面白エ眼エしてんなア」

女性はそう言つて祥の顔を見つめる。その顔の近さときたら、あと一ミリでも動けば鼻と鼻がぶつかる近さだ。

祥は一拳に押し寄せる緊張と冷や汗の奔流に、夢とは別種で感覚で息が詰まつた。

眼前で祥を見つめる女性は暫くの間、ほオー、へエー、ナルホドなア、と一頻り感嘆ひとしきの声を上げてから顔を離すと、祥を見据えて三日月型に口を歪めた。あまりに歪んでいたが、それは紛れも無く笑みの形だった。

「惜しいなア、鐘が鳴つてたら間違い無く喰つてたのによオ。オマエ命拾ひしたな!」

「ヒヤハハハ! と壊れたように笑つと、邪気を感じさせない口調で女性は更に言を繋ぐ。

「ま、命は大切にしろよオ。人間様にやあ命つてモンは一つしかねエんだからよっ」

そう言つて通り過ぎていく女性。茫然自失状態に陥っていた祥が慌てて振り返ると、女性は片手を挙げてヒラヒラと力無く振つていた。

「オイラが行くまで喰われんなよオ。テメエはさア」
肩越しに振り返る女の顔は、狂気に歪んでいた。

「オイラの獲物なんだからなア」
「ヒヤハハハハ！ と再び哄笑を爆発させ、女性は後腐れ無く去っていく。」

訳も解らず女性を見送った祥だったが、分かる事もあった。
彼女に近づいてはならない、 という事だった。

後になって冷や汗が噴き出し、祥は視界から女性が消えたのを見計らって、……ようやく胸を撫で下ろした。倦怠感に似た安堵を覚えてしまう。

「……何を見蕩れてるのっ？」
「わあっ！」

不意に耳元で弾けた不満気な声に、祥は心臓が口から飛び出すかと思う程に驚いた。

取り繕うように慌てて振り返ると、そこには先程の女性とは別種の可愛らしさが幼さとして残る、美顔を不愉快そうに歪ませた少女の姿があった。

祥と同じ位の歳に相応な可愛らしい顔立ち、短く切り揃えた髪、綺麗に整った高校の制服、シャンとした背筋に拳措と、見るからに育ちの良いお嬢様と言った容姿を備えた少女だった。その整った顔立ちを見ると、すぐに美少女という単語が出てきそうな程の可愛い女の子。

少女は腰に手を添え、全く、と辟易したように嘆息する。ただそれだけの立ち居振る舞いでさえも気品を感じさせる高潔さがあった。
「わたしという彼女がありながら他の女の目に目移りするなんて、

許さないよ？」

「ご、ごめん。そんなつもりは無かったんだけど……」

「……本当にいい？」

「ずい、と身を寄せる美少女に祥は戸惑うように身を退き、あうあう、と困惑する。」

「ほ、本当だよっ」

「……ふふ、冗談だよ、祥くん。わたしは祥くんを信じているよ」

「む、夢生ちゃん……」

意地悪な笑顔を浮かべてウィンクする少女　夢生に、祥はタジタジになってしまふ。

御淵^{みづち}夢生。祥の彼女であり、クラスメイトでもある。小さい頃　祥が両親を亡くし、挟峰にいる祖父を頼りに来た時知り合った少女である。家が近所だった事もあり、幼馴染のような間柄が中学の頃まで続き、高校二年になった今、祥の彼女となっていた。

夢生の端麗な容姿から恋敵は非常に多かったので、その座を獲得した祥は周囲からイジメ半分からかい半分の、ちよつと甘酸っぱい高校生活を満喫していた。……とは言うものの、温厚な祥にちよつかきを出すと言っても半分以上は悪ふざけで、本気で二人の恋仲を破綻させようという輩は今のところ現れていなかった。

容姿は幼さの残る可愛らしいモノなのに、話してみると意外にも彼女には大人びた印象がある。独特の空気と本心を決して覗かせない強固な仮面^{ボーカーフェイス}を持ち、祥は恋仲となった今でも彼女の事を深くは知らなかった。故に祥は自身の告白が成功した事自体謎に思えてならないのである。

以前聞いた事がある。どうして僕の告白を受けてくれたのかと。その答はと言つと、

「わたし、何かに一途になる人って好きなの。直向きな心に惹かれちゃうんだあ。祥くんからは、そういう気持ちを感じたんだよ」

それは暗に、夢生に対する想いを確りと感じ取ってくれたのかな、位にしき思考が及ばなかったが、何にしたって自分が彼女に認められたような気がして、祥はその事を思い出す度に嬉しい気持ちになる。

「さ、行こう、祥くん。学校に遅れちゃう」

「あ、うん」

「……あと、遅れちゃったけど、　おはよう、祥くん」

柔らかな微笑を浮かべる夢生に、祥は心臓の高鳴りに気づきつつ、うん、おはよう、と若干照れながら挨拶^{アイサツ}を返した。

「最近は本当に暑くなったよね」

隣で咳きが漏れたのを聞き取り、祥はうんと頷く。

「もう六月の半分も切ったからね。……今年梅雨入りが遅いつて言ってたよ」

「ジメジメするのはもつと嫌だなあ。早く夏にならないかな」

「でも今年は酷暑だって話も聞いたけど」

「……この際暑くてもいいよ。夏休みになれば、祥くんもつとたくさん遊べるから」

何気無く雑談に爆弾発言を投下する夢生に、祥は戸惑いながらも苦笑を返した。少し頬が赤いのは自身でも判っていた。

そんな祥の様子を見て微笑を浮かべる夢生には敵わない、と祥は更に苦笑を濃く滲ませる。

まだ静寂が残る住宅地を二人が歩いていると、人だかりを見つける。そう多くは無いのだが、皆足を止めて人の家を覗き込んでいる。

二人は顔を見合わせ、進路上その人だかりの横を通る時、何の野次馬なのか悟った。

焼け朽ちた家がそこにあつた。外郭が僅かに残っていたがほぼ全焼だ。微かにまだそこには木の焦げる臭いが漂い、この火災が昨日、或いは今日未明に起こった事を克明に曝していた。警察官が黄色い紙紐テープの囲いの中で黒く焼け落ちた家の近くを歩き回っている。

「……昨日のサイレンはこれだったんだ……」

夢生が小さく漏らしたのに気づいて、祥は振り返った。沈痛な面持ちの夢生は昨日の夜中、消防か警察か分からなかったけれどサイレンの鳴る音が近くで聞こえたという話を祥に告げた。

祥はその頃は夢の中だったので全く気づかなかつた。その時刻は深夜と呼べる時間帯だったらしく、夢生ももう寝る間際だったらしい。

「ねえ、聞いた？ 何でもまた放火みたいよ」

「ああ。あれだろ？ 一人暮らしの奴を狙った、殺人放火魔」
黒山を通り過ぎる時に聞こえた野次に、夢生は更に表情を暗くする。

「……怖いね。まだ犯人捕まってるみたいだし」
そう愁いを帯びた声を発する夢生に、祥も表情の色合いを落として頷いた。

連続殺人放火魔。その犯行は随分前から確認されていた。

祥の記憶の中では三年前には既に始まっていた。それから幾度と無く犯行は繰り返され、中には模倣犯みたいな者まで現れ始めた。狙われるのは専ら一人暮らしの人間。そこに男女や老若は関係無く、或る意味無差別に犯行は行われている。その犯行は残虐非道で、被害者に重度の暴行を加え、最終的に家に火を点けて証拠を全て隠滅する……併も被害者が生きたまま火を点けるといふ非道ぶりに、世間は少なからぬ恐怖に慄いていた。

あらゆる証拠を炎で焼却するため未だに有力な手掛かりが見つからず、初犯だと思われる事件から三年の月日が経った今でも犯人は特定できていない。人物像としても様々な憶測が飛び交うだけで逮捕に結びつくような話は全く上ってこない。

「祥くんも一人暮らしなんだから戸締りには充分気を付けてね？」

「うん、分かった。それに心配しなくても僕なら大丈夫だよ」

「本当にい？ それ、明確な根拠でもあるの？」

「う……それは……」

「何なら、犯人が捕まるまで泊まりに行つてあげよつか？」

小悪魔的な笑みを浮かべる夢生に祥はあわあわと手を振って、

「いつ、いいよっ、そんなんっ、大丈夫だからっ」

「ふふふ、可愛いなあ、祥くんは」

「……夢生ちゃん、からかつてるでしょ？」

クスクスと口許に手を当てて忍び笑う夢生を見て、不機嫌そうに唇を尖らせる祥。

すると夢生は、あら、と祥を見つめて、

「わたしはいつも本気だよ？ …… 祥くんの許可さえ下りれば、いつだって泊まりに行つてあげるよ？」

「え、あ、えと……」

顔を紅潮させて言葉に詰まる祥に、再び夢生は口許に手を当てて上品な笑声を上げる。

「ふふ、本当に可愛いなあ、祥くんは」

「……」

絶対に遊ばれてる、と肩を落とす祥に、夢生はうふふ、と笑っていたが、やがて真顔に戻り、肩越しに祥を振り返つて、すぐに顔を前に戻した。

「……大丈夫、何が遭つても祥くんはわたしが護るから」

「え？」

「祥くんは何も心配しなくていいよ」

ニツコリと華やぐ夢生に心を奪われながらも、祥は夢生の言葉を半分も理解できず、小首を傾げてしまう。

挟峰市 規模はそんなに大きくなく、内包する学校数などからしても都会と呼ぶより田舎と言う形容の方が似合う地域だった。見栄えのする商店がある訳でもなく、有名な土産や建造物も無く、近隣の町より見劣りしてしまう人口五万人弱の比較的小さな市だった。市の北から東、そして南に孤を描くように山が連なっている事から通行の便がそれほど良くなく、有体に言えば発展途上の市だった。

挟峰第一高等学校。通称『第一』。祥と夢生が通う高校だ。挟峰市の中では目立つような高校ではなく、かと言って偏差値の低い高校でもない、中級という言葉が似合う学校だった。校舎が広過ぎる訳でもなく、地方程の窮屈さでもない。野球部が有名と言えるが、県主催の試合で準決勝以上に進んだ事が無い次元だ。何にしても有名でなければ無名でもない、目立ち過ぎる事も目立たない事も無い『普通』の高校。

二階にある教室の自分の席に鞆を置き、退屈そうに始業の鐘が鳴

るのを待つ祥は、ふと視線を空席へと向けた。誰もいない席が教室の中で忘れられたようにぼつねんと浮かび上がる。

誰も気に掛けない席の主は、異世衛いせいまもるという祥とは幼馴染の少年である。幼馴染……とは言ってもそうたくさん一緒に時を過ごした訳ではなく、時折話す程度の関係だ。単に小学校の頃から同じ学校の同じクラスが多かっただけ。その程度の関係なのだが……

「……今日は、来るかな」

何と無く彼の事はよく気に掛けていた。体が丈夫じゃないとか、気が弱いとか、そういった心配をしている訳ではなく、彼はどこか変わっていて、それが気になるだけだ。

一言で言えば一匹狼。一人で読書をして時を過ごす事が多い彼は、人と関わりを持つ事を極端に嫌う……と言うのが祥から見た印象だった。話し掛ければ応じるのだが、人を避けているような印象が付き纏う。学校に来るのは単に高校を出た方がいい職に付ける、それ位の意味しか感じられないほど行事にも消極的だった。

だが祥は彼の事が何と無く気になるのである。小さい頃から衛を見ていた分、皆の輪に入ってきて欲しいな、と思うし、彼とはもつと色々な事を話してみたいとも思っていた。いつも難しそうな本を読んでいる彼は一体どんな事を話題に乗せるのか、祥はとても気になっっていた。

衛はよく学校を休む。先程述べたように体が弱いという訳ではなさそう、先生は何も言わないが、単なるサボリのように思える。誰も気に掛けないし、気にも留めない。衛は学校に友人を求めているのかも知れない、と祥は考えていた。

黒板の上に掛かった時計に眼を移すと、始業までもう時間が無い。今日もサボりかな、と祥が諦念を嘆息に混ぜて吐くと、

ぐる、と右眼が疼くのが分かった。

蠕動する　まるで眼球が祥の制御を逃れたように、別の意志を持ったかのように蠢動する。

不気味なその感覚を祥が自覚した瞬間、　教室の後ろ側の戸が

開き、制服を纏った少年が入ってきた。

漆黒の髪をぞんざいに伸ばし、両眼を隠すように前髪を垂らした姿は、一目で分かる。異世衛だった。

身長は祥程 高校生としては平均的な体躯に、表情といい雰囲気といい、陰気な空気が覆っているように思わせる暗い印象を周囲に与える容姿。肌は白さが目立つ、いかにもインドア風な雰囲気を感じていた。体つきは逞しいとは言えないが、割と肉付きは良さそうに運動をさせれば好成绩を残せそうな印象がある。制服にはあまり皺シワが無く、綺麗にアイロンを掛けているようだった。

寡黙な動きで誰もいなかった席に着くと、早速鞆から小さな文庫本を引き出し、頁を繰って静かな佇まいで読書を始め。

その姿を盗み見て、右眼が疼くのが納まらなかった。

何だ？ いつもは目覚めた時にしかならなかったのに……！
自分の意志で鎮められない右眼の蠢動に、祥は胸に重石が付けられたように焦り、咄嗟に瞼の上から右眼を押さえた。

『抗うな、小僧』

脳髓に響く女性の囁ささいた声は、併し耳朶を打たずに頭に溶け込んだ。

周囲を見回しても誰も祥を見ていなかったし、話し掛けたような仕草をする者もまた皆無だった。

……誰の声だ？

『くく、此処にきて好機が巡ってくるのは』

頭に溶ける囁いた声は、しかし鼓膜を揺らさず脳にだけ響く。

祥は不思議そうに周囲を見回すがそんな声を出したような者は誰もおらず、更に祥は疑問符を頭の上に並べていく。

『案ずるな、直に貴様は』

眼球の蠢動が納まり、同時に頭の奥底に響く声も止んだ。

……何だったんだろう？

訳も分からず小首を傾げていると、衛がこちらを見ているのと眼が合った。

衛の顔には驚きが刷かれ、まるで祥を珍品と勘違いしたような眼差しを向けている。

「……………」

祥は一瞬自分が見られているのか分からず困惑したが、すぐに自身を見て驚いているのだと悟り、更に戸惑う。

自席から立ち上がり、祥は衛の前へと移動する。衛は驚きを再び黙然とした仮面の下に仕舞い込み、文庫本へと視線を戻そうとした。

「えっと……………おはよう、異世くん」

「……………」

栞を挟んで本を閉じ、衛は見上げる形で祥に視線を向け直す。

感情の通わない黒曜石のような瞳が祥の姿を捉える。

「……………何か用か？ 刻木」

素っ気無く衛は返してくる。感情を殆ど抑えたような起伏の乏しい声音に、祥は苦笑を浮かべ、だが折角できた話し掛ける機会を逃さないように尋ねる。

「何で僕を見て驚いてたの？ 僕に何か付いてる？」

「……………」

黙したまま衛は祥を見上げ続ける。睨みつけるとか、疎ましいと思っている訳ではなく、単に言葉を探しているような、そんな空隙だった。

やがて祥が質問をし直そうかと思いついた頃、

「……………幻覚が、見えただけだ」

「幻覚？ ……どんなのか、訊いてもいい？」

「……………」

また長い間があるのかな、と思った祥だったが、今度の返答は然して間が無かった。

「……………化物」

「え？ それって……………僕のどこに見えたの？ 肩の上？ 頭の上？

それとも……………」

「オマエが、化物に見えた」

どくん、

質問を遮ってまで発せられたその言葉の羅列に、祥は一瞬思考が正常に働かなかった。

(……僕が、化物に、見えた?)

暫く沈黙の間が在って、 やがて祥はくす、と微笑を零した。

「そつか、僕が化物、か。……それって、その本に出てくるような奴？」

ニコニコと害意の欠片も感じさせない口調で応じる祥に、衛は黙して返事を遅らせる。

衛は文庫本のカバーを取り外し、その表紙を黙って祥の前に差し出した。

真つ黒な背景に白い幾何学模様と祥の知らない文字が記された円が描かれた、如何にも胡散臭そうな本だった。

「……俺は、悪魔や魔物と言った幻想的な存在は信じていない」

祥が呆気を取られている間にカバーを掛け直した。衛は、だが、と言を継げた。

「それとは別に、人は内に化物を飼っているんじゃないかと、思う時がある」

「……寄生虫とか？」

「……物質的なモノじゃない、精神的なモノだ。……特殊な嗜好や性癖は、それだけで人を化物と同義にするだけの影響力があるんじゃないか、と」

祥は話に付いていけず、頭の上に疑問符を乱舞させる。

「えっと……それって、精神が病んでるって事、かな？」

「……仮定の話だが、潔癖症の人がいたとする。その思想が極端に向かうと、全てを綺麗にしたいくなる。その人物にとっての汚れを取るためには、どんな労力も厭わないだろう。完全に綺麗にするために、どんな事だってる。……究極的に、人を殺す事になってもだ」

「……」

「……極端な話だが、有り得ない話ではないと思う。その精神は

「から、と教室の戸が開き、男の教諭が入って来て、全員席に着け
ー、と声を飛ばしたのが聞こえた。教室の中が急に慌しくなり、皆
自分の席へと駆け戻って行く。それを眺めるように衛は辺りに視線
を配り、それから祥へと言の矛先を向け直した。

「……時間だ、席に戻れ、 刻木」

「あ、……うん、じゃ、また聞かせてよ、その話」

そう言っただけ祥は自分の席に戻っていった。

文庫本を鞆の中に戻した衛は暫く横目で祥の様子を窺っていたが、

……それもすぐに止め、授業に集中し始めた。

…… 本当に錯覚、なのか？ 刻木……

そう頭の中で呟きを漏らした後、衛は顔を黒板に向け直した。

式章 / 必定の遭遇

「……複雑な心境だけど……でも授業が半日で良かったね、祥くん」

「正午を過ぎた狭峰はざまねの市街地。商店街と言うべき大通りは夕方こそ一番の活気を見せる場所なのだが、平日だと言うのに学生達の姿で溢れ返っていた。中には既に私服に着替えを済ませた者の姿さえ見受けられる。」

青々と茂る街路樹には早くも夏の虫が張りつき、喚声を辺りに響かせている奴も幾つか見られた。直射に加えて硝子張りのビルやアスファルトの照り返しが、周囲を一気に灼熱へと変えていた。道の端では早くもアイスクリームの屋台が開かれている。

「でも、それだけ外は危ないって事なんだよね」
「夢生むむがにこやかに声を掛けてくるのに対し、祥さちは苦笑を滲ませながら諫めるように応じる。」

学校は半日で生徒を帰宅させた。その理由は連続殺人放火魔が未だに捕まらないとか、犯人が挟峰の市街にいないのではないかと噂が立っているとか、学校に脅迫文が届いたとか等々（エトセトラ）。様々な憶測が飛び交っているが、学校側からは『現在の挟峰市は危ないので、皆自宅で待機しなさい』と一方的な通達モで、よほどの優等生で無い限りその忠告を聞く訳が無かった。学生にとっては降って湧いた絶好の遊び日和なのだから。

「祥くん？ そんな心構えじゃ人生楽しく生きられないよ？ もっと良ボジティブ好的に物事を考えなくちゃ」
「家庭教師のような態度で窺たしなめる夢生に、祥は、あははと更に苦笑を濃くするだけだった。」

まるで気にしない彼の態度に、むう、と頬を膨らませて夢生は不機嫌そうに祥を睨みつける。

「……祥くん。まだ今朝の事、わたし怒ってるんだからね？」

「今朝の事？」

「ふうん、祥くん忘れちゃってるんだ。そっかあ、ふうん」

「あ、あの、夢生ちゃん……？」

「あーあ、わたし拗ねちゃいました。何か奢ってくれないと、とてもじゃないけど機嫌が治りそうにありません。あーあ、どうしまし
よう？」

「お、怒ってる……？」

「やっと気づいた？ わたしは今とてもご立腹です。そうねえ……
クレープで我慢してあげる。イチゴミルクの」

「……」

ぷいっとそっぽを向いて振り返ろうともしない夢生は、こうなる
ともう梃子テコでも動かない事を祥は知っていた。洪々と財布の中を檢
めて、何とか窮地は切り抜けられる事を悟る。

「噴水広場で待ってて、すぐに買ってくるから！」

そう言っただけで駆け出す祥をヒラヒラと手を振って笑顔で見送る夢生。
その瞳が細く鋭く眇められる。

周囲に意識を張り巡らすと、自身を環視の眼から抹消するように、

詠む。

「《転界》てんかい」

言葉を発した刹那、夢生の姿はその場から掻き消えた。……まる
で透明な塗料ペンキでもブツ掛けたみたいに、瞬間的に夢生の姿は消失し
ていた。

その姿が次に現れたのは先程いた場所からは数キロ離れている、
祥が指定した場所とは別の広場。制服を着た大勢の若者や、昼の休
憩時間と思しきサラリーマン風の男達、子連れの老婆の姿などがあ
ちこちに見られる。広場は大きな自然公園の一部らしく、辺りには
樹木や草花以外の視覚的な物体は見受けられない。色取り取りの草
花を觀賞するためか、白い塗料を塗りたくった木製の長椅子ベンチが幾つ
か設けられているだけだ。

その長椅子の一つに一人の女が座っていた。眼前に突如として現

れた制服姿の女子高生を見て、その瞳　深い闇を湛えたような禍々しい感情が渦巻く瞳が喜色に眇められる。

今朝の、紅いコートの女だった。

「ほオ、ここにやア《間術師》まじゅつしもいんのか。クソヤベエ《歪》ひよみでも見つかったか？ 或いは《屠鬼》とぎでも見つかったか？ ……何だア？ オイラが逃げるとでも思つて飛んで来たつてか、あア？」

「……《殲滅屋》せんめつや風情がこの程度で尻尾を巻いて逃げると言つたら、とんだ三流以下の紛い物だわ。警告に来たの」

紅いコートの女は長椅子に腰掛けたまま夢生を見やり、皮肉った憫笑を刷く。同時にその笑みには隠しきれない程の獰猛さが滲み出ていた。

そんな表情の委細には構わず、夢生は先を継ぐ。

「今朝の少年を憶えてるわね？ 彼は殺さないで」

「今朝ア？ ……あア、あの面白エ眼エ持つてる奴の事がア。……

へエ？ 因みに訊いとくが、理由は？」

「わたしの彼氏だから」

ほかん、と女は呆然と夢生を見つめていたが、やがて、

「ヒヤハハハハ！！ あーあーナルホドナルホドオ！ そりや

殺されたら堪ンねエ訳だ！ ヒヤハハハハ！」

「そ。分かつて貰えたかしら？」

「ざけてんじゃねエぞクソガキ」

全く間を置かず吐き捨てる女に、併し夢生は表情をピクリとも変えなかった。

醒めた眼光で夢生を射止める女は、はアーと重たい息を吐き散らし再度睨み直す。

「オイラはオイラのやり方で仕事やってんだ、テメエに文句を言われる筋合いはねエな。それとも何かい？ テメエがここに《檻》を張れるとでも吐かしやがる気か？ テメエがオイラに依頼するつっ
ーんなら、話は別だが？」

「ま、端から期待はしてなかったんだけど。……はあ、分かつては

いたんだけどね、この結末」

「ああん？」

煮えきらない返答に、思わず女が苛立ったような声を上げる。

腕を組んだ体勢で、ふう、と嘆息を零し、遠い空を見上げる夢生。その視線の先には虚空しかなかった。

「……でも、可能性が在る限り夢見ちやうじやない。実現不可能を」
ポツリと零れた独白に女は一瞬の空白を空け、容赦無く嘲笑

を返す。

「アハハハハ！ 可能性は信じるに値しねエゼ嬢ちゃん？ 助かる

かも知れない、死ぬかも知れない、どっちも《地獄》じゃ等しくお陀仏だ。《地獄》に在るのは、死だけだ。灰色は有り得ねエ」

再び哄笑を上げる女に夢生は苦々しい表情を滲ませ、背を向ける。

「……《殲滅屋》がいなければ《地獄》が浄化されないのは分かってるから、アナタを殺すつもりは、現在に限ってないわ。……但し、今朝の彼 祥くんに牙を剥いた瞬間、その首刎ね飛ばしてやるから、そのつもりで」

そう言っつて姿を消す夢生を見送り、女は長椅子から腰を持ち上げる。

「さっ、てっ、とっ。へっへっへ……こーりや面白くなってきやがったぞうっつ」

胸の前で蠅ハエのように手を擦り合わせ、唇を舌で舐め回す表情は実に恍惚と輝いていた。

「よお、その姉さん」

そこに突然無粋な声が湧き上がり、一気に意気が消沈してしまった女は辟易とした表情を刷いて面倒臭げに振り返った。そこには想像した通りの無粋な連中の姿。

大学生だと思われる四人組みは、一見すると優しそうな形ナリをしているが、……その奥底に秘める内情をそれと無く悟った女は露骨に辟易と返事を寄越す。

「ンだよ、オイラに何の用だ？」

「お、キミ変わった娘だね？ それって漫画のキャラか何か？ その辺の話、俺らに聞かせてくれねえ？」

ヘラヘラとその気も無いくせに話し掛けてくる男に苛立ちを感じ、
紅いコートの方はせせら笑いを刷いて吐き捨てるように告げる。

「あんな、いつこ言つとくぞ？ オイラはなア、テメエらみてエなクソ弱エ奴らにやア欠片も興味湧かねエんだ。分かるか？ 害虫にどうしたら興味を持てるか是非とも教えてくれよ？」

「……おい、あんま巫山戯た事吐かしてんじゃねえぞコラ？ 幾ら温厚な俺でも怒るとマジヤベエからよお」

凄味を利かせているのか、男が顔を険しく歪めて擦り寄ってくる。周囲の男達は表情こそ変えていなかったが意志は同じらしい。

「古典的っつーかよオー、もっとマシなゴミはねエモンかなア。ま、また後で遊びに来いよ、その時や遠慮無く喰つてやつからさ」

「はあ？ おい、この女電波系か？ さっきから全ツ然会話通じねえーんだけど」

「今ならまだ間に合うぜ？ サツサとこの町から遁ずらした方がいいと思うぜエ？」

女は凄絶な笑みを浮かべるが、男達は顔を見合わせて失笑を浮かべるだけで取り合おうとしなかった。

「分かった分かった。何でもいいから来いよ、一緒に遊んでやつから」

そう言つて手を引こうとする男だったが、刹那に股間を蹴り上げられ、豚の鳴き声のような呻きを漏らすと糸の切れた人形のよううに跪く。

思いつきり股間を蹴り飛ばした女はニタニタと下卑た笑みを刷いたまま、リーダー格と思しき股間を蹴り上げられた男の髪を掴み上げ、無理矢理視線を合わせるように立ち上がらせる。男が痛みで呻き声を発する。

女は顔を近づけ、猥染みた眼差しで男の瞳孔を射抜いた。

「だアから言ってるんだろ？　まだお遊戯の時間じゃねエんだよ、鐘が鳴ったら遊んでやるから、それまで我慢しやがれ。……ま、長生きしてエんなら、オイラから可能な限り遠くへ逃げるこつたなア。そしたら、ちよこーっとは生き延びれるかもよオ？」

「ヒヤハハハハ！　と眼前に哄笑を浴びせ掛け、髪を離れたその手で鼻頭に正拳突きを叩き込み、男を殴り倒す。」

男は鼻血を出しながら蹲り、すぐには動き出せそうに無い。取り巻きの男達も即座には手を出そうとせず、何の後腐れも無く立ち去る女の背中　巨大な大蛇を見送る事しか出来なかった。

「ぐ、くそ、許さねえ……！　おい、あの女追うぞ」

蹠踉めいろういて鼻を押さえながらも立ち上がるリーダー格の男に取り巻きの男達が群がる。

男の優しそうと表した顔は憤怒に燃え上がり、同時に羞恥で真っ赤に染まっていた。

「仲間を呼べ、全員だ！　……あのアマ、一人になったら襲うぞ。二度と外を出歩けねえようにしてやる……！」

噴水のある広場の近くにある繁華街で祥は頼まれた品を買おうべく、夢生の好きなクレープを販売している屋台を探していた。犇おしおく人の群れは平日の昼間とは思えない程に多い。制服を着たままの学生が多いが、このまま教諭にでも見つければ大変な事になるまいか、と祥は思うのだが、自身も帰宅せずそのまま繁華街に繰り出しているのだから人の事を言える義理は無かった。人込みの発する熱気と頭上から照りつける太陽熱で、少し思考が鈍ってきたようにも感じる。

夢生が無類の甘い物好きと知っている祥は、彼女と付き合い始めた頃からちよくちよく甘味類を販売している店を探し歩いていた。この繁華街も実は歩き慣れた場所である。屋台の場所も正確に把握しているので歩みに澱みは感じられなかった。

「……………うん？」

不意に視界に飛び込んできた奇怪なモノに一瞬祥は眼を奪われた。初めて見る格好をしている、親子と思しき人影。一方は大人……少なくとも中学生ではないだろう、祥の身長よりもまだ頭一つ分ほど大きい長身の人物。もう一方はその腰程しかない小柄な矮躯わいくの人物。彼らが身に纏っている物は全身を覆い隠すような暗色系の外套と、それに付属する頭巾フードだった。

漫画の中だけしか見る事の無かった格好をした人物を垣間見て、祥は小首を傾げた。仮装でもしているのかな？ とそこで思考を打ち切るうとして、幼い方の人物が不意にこちらへ視線を向けてきた。

「え？」

頭巾の影に隠れた瞳は猛獣染みた輝きを宿しており、まるで怪物に睨まれたように祥はその場に縫い止められてしまう。足が竦む程に獐猛な眼差しを向けられ、呼気が急停止した。

意識が完全に幼い影に縫いつけられると同時に、幼い影が瞬間移動でもするかのように飛ぶように駆けて来た。

息つく暇など皆無で、刹那的に距離を殺して接近した影にそのまま鳩尾みぞおちに強烈な殴撃プロが喰い込まれると祥の意識は暗転した……

「……おやおや、束子たばねくん、この子どうやら民間人みたいだけど……

「……本気マジかよ！？ えー……兄貴どうしよう……？ ……で、でもいいよな？ どうせ最後には《殲滅屋》に狩ヤられちまうんだから、今ここで死んじまっても……」

「……束子くん、私達は《殲滅屋》じゃないんだ、幾ら私達が裏方とは言え何の罪も無い人間を襲うのは……」

「あつ……じゃ、じゃあオレ、罰せられるのか……？ 嫌だつ、嫌だぞ兄貴い！」

「……？」

祥が意識を覚醒すると、視界に心地良い程の晴天が映り込む。夏

を予感させる少し熱っぽい風が通り抜け、髪がさら、と揺れるのを感じた。晴天が少し窮屈そうなのは、どこか建物と建物の間……路地にもいるせいだろうか。その視界にぴよこつと幼い女の子の顔が入り込んだ。

「あ、気が付いたみたいだぞう！ 兄貴、良かった、コイツ生きてる！」

「うん、さつきから生存は確認してたんだけどね……。大丈夫かい？ 動ける？」

「あ、えと、はい」

視界に映り込む心配げな少女の顔から一旦視線を逸らし、身動きして 腹部に鈍痛が響いた。

「つつ……あれ、何かお腹が……？」

撫でるように臍の上辺りを摩つたら再び鈍い痛覚が蘇り、祥は顔を顰めた。額に脂汗が浮かび上がってくる。

痛みに堪えながら起き上がると、そこがどこのかすぐに判った。先程までいた筈の繁華街の路地裏だった。人通りのあまり無い、夜には出来る事なら近づきたくない場所である。確か野良猫の溜まり場でもあった筈だと、祥は起き抜けの思考で想起する。饅^すえたような臭いが辺りに漂い、長時間いたら気分が悪くなりそうだと感じる。頭上の晴天を裂くように配線があちこちに伸び、換気扇が回る羽虫が飛ぶような音が腹の底に響いている。

どうしてこんな場所^{トコロ}に倒れていたんだ……？ と現状を思い出そうとして、ふと、その場にいる人物を見やった。

二人とも暗色系の外套を纏っているが、今は顔を隠していた頭巾を外し、その容姿が窺えた。

一方が上背のある、女性とも男性とも取れる中性的な、20代前半と言った若く精悍な顔立ちの人物。群青色の髪はうなじが見える程に短く切り揃えられ、一見しただけでは性別が判然としない。外套を纏っているために体型も判然とせず、何とも掴みどころの無い人物だった。祥は何故か既視感を覚えたが、どこで見たのか即座に

は思い出せなかった。

もう一方が対極のように小柄な矮躯の、ハツとするような可愛らしい顔立ちをした幼い少女。その容姿は10代にも満たないようで、小学生だとしても低学年に達しない幼さが見て取れる。色素の薄い灰色に近い髪は腰に届きそうな程の長さがある。日本人離れした整った容姿に加え、瞳は翡翠色というまるで外国の人形を連想してしまふ風貌だった。……何故か首には動物が付けるような首輪が鈍い輝きを発していた。

「まずは謝罪をと思う。本当に済まない事をした」

そう頭を下げたのは中性的な人物　声を聞くに女性のような感じだったが、

「兄貴は謝らなくてもいいつ。えっと、ごめんな？　オレが勘違いして殴っちまって」

……男だったのか、と即座に考えを改めて、慌てふためく女の子を見据えると祥は数瞬惚けた顔をしていた。　うん？　と小首を傾げて不思議そうな表情に移ろう。

「えっと……僕、キミに……殴られたの？」

「おう、そうだ。本ッ当済まねエ！　《狂徒》きやうとだと思っちまってさ

……」

思わず少女に視線を定めて考えてしまう。園児と言われても通用しそうな程に幼い女の子……外套のせいで体型は判らないでも、その身長からして祥の胸程しかないのだ。そんな女の子に殴られて、併も気絶までしてしまう……

……僕、今もしかしてメチャクチャ情けなかったりする？

ガックリと肩を落とした祥を見て少女が慌てて顔を覗き込んでくる。

「だ、大丈夫か？　い、痛むか？　オレ本気でやっちまっただから、肋骨破損してるかも……」

……どんな力を持つてるの、この娘？

ぼかん、と女の子を見つめる祥に気づいたのか、女の子は、あうー、と視線を逸らして、へへへ、と鼻頭をポリポリ掻き、《兄貴》と呼称した方へ顔を向ける。

「兄貴、どうする……？」

「……そこで私に振るのかね。……そうだね」

《兄貴》は祥を見ると夜の海原のような瞳を眇め、意味深な微笑を浮かべる。

「私も興味深いと思っていたところだ。私達の事を話したところで、信じる信じないは相手次第だ」

「じゃあ決まりな！」

「えっと……何の話を……？」

キョトンと一人話に付いていけない祥が質問を上げると、女の子がくるつと振り向いて可愛らしい顔に真剣みを帯びて言葉を紡ぎ始めた。

「自己紹介が遅れたな。オレは《魔狗》^{ヘルハウンド}の束子^{たばね}。名字はねエから、束子^{たばね}ってそのまま呼んでくれよ。で、こっちの兄貴が

「玖領^{くりゅう}檻雅^{おりのま}だ。……あーっと、いきなり言われても混乱するかな、

《魔狗》^{ヘルハウンド}って言われても何の事かサツパリだろうし。……まあ、かと言って説明が要るかと言われればそこまで必要性も感じないし……

……

「兄貴、ストップストップ！ また勝手に自分の世界に入るなよっ！」

幼い女の子 束子が慌てて《兄貴》 檻雅の外套の裾を引っ

張り、彼の意識を現実に戻した。

檻雅はハツと我に返って祥を見やると、あはは、と微笑を刷いた。

「済まないね、私の悪い癖なんだ。ついつい人前でも没我してしまっう。……まあそれはさておき、キミ、時間は大丈夫かね？」

「時間……？」

「あ」
はたと思い出す。夢生ちゃんのイチゴミルククレープ！

慌てて駆け出そうとする祥を見て、檻雅は片眉を上げて驚いたよ
うな仕草をする。

「急用かね？」

「あ、その、彼女を待たせてるんでっ。済みません、これで失礼し
ます！」

そう言っ腹を押さえながら走り去る祥を見送り、檻雅はポツリ
と独白を零した。

「……彼女持ちか。とても残念だよ、少年。せめて　少しでも長
く生き延びられますように」

檻雅がいる場所の更に奥まった場所にある、似たような場所に思
える路地裏では、一人の少年を囲んだ三人の青年が下卑た笑みを浮
かべて、少年の腹部を蹴り上げていた。人気の薄い路地裏ではその
音はやけに重く響く。

「げ、ふ……ッ」

左眼を包帯で覆った少年は涎を吐きながらその場に屈した。膝か
ら力が抜けていき、立ち上がる事もままならない。

「おーい、蛆虫ちゃん？　俺言わなかったっけ？　オマエ借金
30万もしてんだぜ？　俺達全員にさあ」

主犯格の青年　野球帽を被った男は、ニコニコと仏のような顔
をして少年の顎に蹴りを突き込む。

少年は喉を押さえ咳き込み、そのまま蹲って動かなくなる。

「何でオマエ一円も持って来てねえの？　おかしいよなあ、おかし
いよねえ？　どうしたのかなあ、何で俺に逆らってるのかなア！？」

蹲る少年の頭に蹴りをブチ込み、少年の体が再び地面を転がる。
痛みは生じている筈だが、最早呻き声すら上がらない。

ニコニコとした仏のような顔に青い血管を浮かび上がらせ、青年
は少年の胸倉を掴み上げて引き摺り起こす。

引き摺り起こされた少年は併し恐怖も怯懦も感じさせない眼差し
で青年を見据える。そこには一切の気後れも無かった。

その眼差しを睨みつけられたと勘違いした青年は気分を著しく害する。

「蛆虫ちゃん？ 何かなその眼は？ 折角片眼だけは放置しておこうと思つてたのになア。 潰しちゃおう、か、な、あア！？」

青年が仏のような顔のまま拳を振り上げ 少年はその僅かな空隙を縫うと、胸倉を掴んでいた青年の腕を隠し持っていた短刀ナイフで切りつけた。

「いぎッ！？」

ぞ、と怖気が腕から全身に走り、青年は短い悲鳴を漏らし、遠ざかるように少年の顔を殴り飛ばし、顔に憎悪を孕ませる。

「て、ん、めエ……！ ンなモンで俺が引き下がると思つてんのか、おオ？ やれ！」

取り巻きの一人が持ち出したのは、少年の持つ短刀よりも長さ（リーチ）がある木刀だった。

肩でトントンと木刀で音を立てると、見せつけるようにゆっくりと振り上げ

鈍い破碎音が弾け、少年がその場に頽たふれる。

木刀で少年の頭を殴りつけた青年は引き攣くわった哄笑を上げ、主犯格の仏顔の青年へ振り返る。

仏顔の青年は苛立たしそうに頭部から出血している少年を見下ろし、はあ、と重たい嘆息を漏らす。

「ったくよお、いいか、よく聞けよ蛆虫ちゃん？ 今のも授業料で請求するからな。 そうだなあ……合計で50万つてトコか。 分かつたか？ もし次持つてこなかつたら、オマエん家行くから」

「……」

少年は蹲すまったまま何事かを呟き、ゆっくりと立ち上がる。

その様はまるで亡者が亡霊だった。 陽炎のように実体を伴わない、そこに少年がいるのにそれが少年ではないような、そんな印象を与える光景が青年達の前に広がっていた。

「……何だつて？ よく聞こえねえーよ、ハッキリ言えや、蛆虫ち

やん」

「……ない、……だ、……りない、……まだ……足りない……まだ、足りない……」

独り言なのかブツブツと意味が解らない事を呟き始める少年に、青年達は顔を見合わせて面倒そうに嘆息を零した。肩を竦めて残念そうに眉根を寄せる。

「壊れちまったか？ ま、いいか。どうせならここで服剥いでみるか？ そしたらもっと面白くなるんじゃないか？」

「違えねえや！」

アハハハハ、と笑声を上げる一同だったが、不意に仏顔の青年が腕に痛みを感じて呻き声を上げた。

「どうした？」

木刀の青年が歩み寄って来て、その異常に気づいた。

先程少年が切りつけた傷。裂傷が走ったそこから大量の蛆虫が湧いて出てきていた。

「ひっ」

木刀の青年が驚いて悲鳴を上げると、それに気づいたもう一人の取り巻きも異常に気づき、仏顔の青年から距離を取る。

「な、何だよこれ……！？ お、おい、ざけんな、何だこれはよお！？」

仏顔の青年が腕を押さえて絶叫し始める前で、少年は構わず呟き続ける。

「……足りない、もっとだ、もっと力が在れば、まだ、足りない、もっと……」

「お、おい！ オマエ、何しやがったんだよ！？」

木刀の青年が再び木刀を振り上げて少年の頭蓋を殴った時、それは露呈された。

はら、と左眼を覆っていた眼帯が外れ、眼孔から大量の蛆虫が噴出した。

ほとほと、と音がしそうな量の量の蛆虫が地面に落ち、少年の周

困だけに白い湖が出来上がる。まるで少年の眼孔が源泉とでも言わんばかりに無尽蔵に蛆虫が湧き、地面を白く染め上げていく。

「ば、化物か……ッ!？」

一見して分かる程に怯え始める青年達に対し、少年は構わず呪文のように同じ単語を吐き続ける。

そう、まるで魔女が呪文を詠唱し続けるみたいに延々と同じ単語を吐き続ける。

「足りない、もっとだ、力が在れば、もっと、まだ足りない、足りない、力が在れば、まだ、もっと、足りない、もっと、力が在れば、まだ足りない」

不気味な詠唱を唱え続ける少年に青年達が怯えて腰を抜かす中、それは発現した。

午後一時になる頃、全てを破壊せんばかりの大地震が挟峰の町を襲った。

この大地震こそが挟峰の人間が気づけた最初の異変だったのだが、これより《地獄》が始まるなどと誰も予想すらできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2492z/>

狂獄 The CrazyInferno

2011年12月11日20時52分発行